

シリーズ

発達に違いのある子どもたち 復興支援講演会 「子どもの心とことばをはぐくむ」を終えて

10月28日と29日に行われた「子どもの発達支援を考えるSTの会」代表の中川信子さんによる復興支援講演会は、台風接近による悪天候にもかかわらず、県内外から多数の参加者があり、充実した講演会となりました。その内容についてご紹介します。

28日は、子どもの発達支援にかかわる従事者向けの講演会で、発達支援センター、児童発達支援・放課後等デイサービス事業所、子育て支援センター、病院、学校、保育園、幼稚園などの専門職の方々が、2時間半にわたる長時間の講演に熱心に耳を傾けていらっしゃいました。中川さんは、演題「子どもの心とことばの発達に向けて」周りの大人にできることについて話され、子どもと保護者を囲む周りの大人は、発達障がいについて正しく知り、子どもの行動の意味を理解し、望ましいかわり方を理解したうえで、子どものすこやかな育ちを保護者と一緒にはぐくむことが大切であることを伝えられました。そして「療育」とは、注意深くていねいに配慮された子育てであり、それは障がいのあるなしにかかわらず望ましい育て方であると教えていただきました。



脳の下にある大脳辺縁系（心の脳）、脳幹（体の脳）の整備が大切であること、そのためには体を動かし笑顔で楽しく遊べる環境が必要であり、遊びや書籍の紹介をされました。広報うとでも以前取り上げた「感覚統合」の重要さを話され、わかりやすい書籍として、「乳幼児期の感覚統合遊び（クリエイティブかもがわ）」「育てにくい子にはわけがある（大月書店）」などを紹介されました。



また、ことばを伸ばすかわり方として、「共同注意（複数の人が一つのものに注意を向けていること）」が大切であり、まずは子どもが注意を向けているものに大人が合わせること、そして、子どもの声や動きをまねたり、子どもの気持ちや動作を代わりにことばで表現したり、大人の気持ちをことばで伝えたりというかわり方が、子どものことばを伸ばすきっかけとなることを伝えられました。「共同注意」は乳幼児期からしっかりと目を合わせることで大切です。

29日は、保護者に向けて「心とことばをはぐくむ子育て」あなたにできること」という演題で講演していただきました。中川さん自身の、非常に苦労をされた子育ての実体験をおりまぜながら、聴きに來られた保護者の方々と等身大の姿で話をされました。「子育てとは、この先どういうことが起こるのか、不安に耐えるということ」を学ぶこと」ということばが、とても印象に残りました。

子どもと接するときには避けたいことばとして、おどかさずことば「しんない」とできないよ、ダメ、いけないなどの乱発、一方的な命令のことばなどで、これらはことばの発達を妨げることに繋がります。できるだけ肯定的に「〜すると〜できるよ」のように伝えること、禁止をするだけではなく、具体的に何をしたら良いのか伝えることが、ことばが伸びる語りかけであると話されました。ことばの発達をはぐくむ書籍として、「ことばが伸びるじょうずな子育て（日本家族計画協会）」「1、2、3歳ことばの遅い子（ぶどう社）」「生まれたときからことばを育てる暮らし方（保健同人社）」「場面別に楽しむ語りかけ」（小学館）などを紹介されました。

宇土市という地域の中で、子ども

を囲む周りの大人が子どものことを共通理解し、それぞれの役割を果たしていくことが、子どもの発達や育ちをはぐくむ最良の環境につながります。お父さん、お母さんが、我が子にこれから何が起こるのかという不安に耐えながらも、一生懸命子育てをされるその姿に、寄り添える大人のひとりでありたいと私は思います。



文書寄贈
NPO 法人 ころこ・コミュニケーションの発達支援「まいすてっぷ」